

【報 告】

学内で創る模擬患者とのコミュニケーション実習 ～学内で学びを深める試み～

土屋彩夏、竹内久美子、伊藤雅子、小笠原祐子

Communication practice with simulated patients at university ～ Considerations for advancing learning at university ～

TSUCHIYA Ayana, TAKEUCHI Kumiko, ITO Masako, OGASAWARA Yuko

要旨

本稿の目的は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受け、臨地実習受け入れ中止に伴い学内で実施された「基礎看護学実習Ⅰ」における授業実践において、発展した学びを学内で提供する方略について検討することである。特に本稿では、臨地で実践を予定していた‘患者との初めての出会い’を効果的に学内で実施するための工夫について報告する。はじめに、基礎看護学実習Ⅰの目標・構成・実際のスケジュールについて概観し、続いて、模擬患者とのコミュニケーションの実際、学習を深めるための工夫について報告した。実践した学内での「基礎看護学実習Ⅰ」のコミュニケーションでは、第1にコミュニケーションの講義とロールプレイとその振り返りにより自己のコミュニケーションの特徴を知り、第2に自己分析と看護の意味の考察から看護師－患者関係を考察し、第3に模擬患者とのコミュニケーションを経験することにより、コミュニケーションの相互作用と深まりを実感することが示唆された。今後、看護学実習という臨地での学びに重きをおく授業形態の中で、学内で何を学ぶことができるのか考えていくことが課題である。

キーワード：新型コロナウイルス感染症 基礎看護学実習 コミュニケーション 相互作用
模擬患者
COVID-19 Infection Practice in Basic Nursing Communication Interaction
Simulated Patient

はじめに

和洋女子大学看護学部看護学科では、1年次に「基礎看護学実習Ⅰ」を設定している。「基礎看護学実習Ⅰ」では、入院療養中の患者の生活の場である病院・病棟の構造・機能を理解し、入院生活が患者にもたらす影響を考えるとともに、看護ケアの実際とその意味について考える。また自己のコミュニケーションの特徴を理解したうえで、患者とかわかることができることをめざしている。さらに、実習全体をとおして、看護学生として必要な倫理的な態度について考え、自己の課題を見出し、今後の学習への動機づけとすることを目標としている。

2020年度、2021年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受け、臨地実習受け入れ中止となり、学内で「基礎看護学実習Ⅰ」を実施した。学内で、遠隔での病院オリエンテーション、講義、課題学習等を実施したが、学生からは「病院で患者様とコミュニケーションをとってみたいかった」などの意見が聞かれた。

2022年度（2022年8月）も、感染者の急増により、実習開始2週間前にすべての病院で臨地実習受け入れ中止が決定した。そのため、2020年度、2021年度の課題を考慮し、1グループ（学生12名程度）に1名の模擬患者を設定した。模擬患者は、これまで1年生と関わりが少ない、看護師として臨床経験のある方（教員を含む）をお願いした。学内で‘患者との初めての出会い’を創り出し、情報がダイナミックに変化する中で「基礎看護学実習Ⅰ」を行った。

本稿では、学内でロールプレイを実施し自分自身のコミュニケーションの特徴を分析し、自己の傾向と看護師の役割を認識した後に、模擬患者に対して主体的なコミュニケーションを実践した「基礎看護学実習Ⅰ」の取り組みについて報告する。

基礎看護学実習Ⅰの目標

「基礎看護学実習Ⅰ」は、1年次の8月に行われる2週間2単位の实習である。

<実習の目標>

1. 医療施設である病院・病床環境について、患者の視点で考えることができる。
2. 看護ケアの実際とその意味について考えることができる。
3. 自己のコミュニケーションの特徴を理解し、患者と関わるすることができる。
4. 看護を学ぶ意欲を高め、看護職者としての自覚を培うことができる。

2022年度の基礎看護学実習Ⅰの実際

1. 実習の構成

1) 実習スケジュール

2022年度「基礎看護学実習Ⅰ」の概要を以下の表1に示した。

表1 2022年度「基礎看護学実習Ⅰ」スケジュール

1日目	実習オリエンテーション カンファレンス（基礎看護学実習Ⅰで学びたいこと）
2日目	遠隔双方向による病院オリエンテーション（多職種からの説明含む） コミュニケーションの基本（講義）
3日目	コミュニケーションの実際（ロールプレイ） カンファレンス（ロールプレイを通しての学び）
4日目	看護学生が遭遇する倫理的な場面から考える看護倫理（講義/演習）
5日目	自己分析（自分の傾向を分析し、自分自身の考え方を考察し、目指す看護師像を考える）
6日目	看護の意味を考える（看護実践が記述された文献・書籍を読み、看護の意味を考察する）
7日目	模擬患者とのコミュニケーション1日目
8日目	模擬患者とのコミュニケーション2日目
9日目	模擬患者とのコミュニケーションからの学び
10日目	カンファレンス（基礎看護学実習Ⅰで学んだこと） 面談

2. 実習内容

1) 遠隔病院オリエンテーション

今回実際に病院に赴くことはできなかったものの、病院と遠隔双方向で病院オリエンテーションを実施した。学生はユニフォームに着替え、看護部長の説明および多職種から業務と病棟看護師との連携の実際について説明を受けた。看護部、病棟、外来、手術室、ICUの看護の機能と役割に加え、薬剤部・臨床検査科・放射線科・リハビリテーション科・MEセンターとの連携を実感することができた。

2) コミュニケーションのロールプレイ演習



ロールプレイの様子

コミュニケーションの基本的な方法の講義後、自分自身のコミュニケーションの特徴を知るために、グループ担当教員を患者に見立てて、訪室し事前に考えた挨拶とコミュニケーションのロールプレイを実施した。学生は実施者、観察者に分かれ、5～7分/人実施したのち、患者役の教員とその場で振り返りを実施した。その後学生は、自身のコミュニケーションの詳細を記録（プロセスレコード）し、翌日グループで自分自身のコミュニケーションの特徴についてカンファレンスを行った。

3) 看護学生が遭遇する倫理的な場面から考える看護倫理

1年次8月に実施される基礎看護学実習Ⅰでは、例年初めて病院で実習する前に、看護学生とし遭遇する倫理的場面の事例について学習し、看護学生としてどのように行動したらよいか学内で考える機会を設けている。2022年度は臨地実習を経験できないものの、これまでと同様、学内で看護学生として患者と接する際に配慮しなくてはならない点について、具体的な行動を考え共有した。

4) 自己分析と看護の意味を考える

自己分析では、学生が自分自身の考え方の傾向を知るために、現在興味・関心を寄せている事柄、自分のライフヒストリーを振り返り、これまでの自分の感情に関与する事柄の共通点について分析した。さらに、自分自身のキャリアゴールを設定し、そのゴールに向かうために今必要な課題について分析した。

看護の意味の考察では、看護実践について記載されている書籍および文章を提示し、その中から学生が興味・関心のあるものを選択した。それぞれ熟読するとともに、記載されている看護実践の意味について考察した。

5) 模擬患者とのコミュニケーション

(1) 模擬患者の事例

今回の実習では、模擬患者は2事例を準備した。

事例1は、脳梗塞を発症し左上肢に麻痺がある患者。回復期にあたりリハビリテーションを中心に行っている。意識障害はなく、呂律が回らない感じはあるが会話は可能である患者を受け持つこととした。

事例2は、右肘頭骨折で術後1週間経過した患者。シーネも外れ、ADLが拡大している。コロナ禍で家

族の面会が制限されており時間を持て余している設定とした。

(2) 模擬患者との実習環境

実習場所は、実習室と各グループにそれぞれ教室を準備した。実習室には、模擬患者の疾患・治療・状態に合わせた模擬病床を準備した。できるだけ臨場感を持たせるよう、事例に合わせて、ナースコールやガーグルベースン、吸い飲みなど配置し患者の病床環境を再現した。



模擬患者とのコミュニケーションの様子

(3) 模擬患者とのコミュニケーションの実際と教員の関わり

学内実習では、指導者との関わりができないため、教員は臨床指導者の役割も一部担った。臨地において、指導者がそれぞれの看護場面から具体的な指導をするのと同様に、模擬患者と学生のコミュニケーション場面において具体的な指導をした。

まずは、学生の身だしなみ、礼儀正しいふるまいといった看護学生としての第一印象にかかわることや、笑顔や声の大きさ、話し方、模擬患者との距離、目線の合わせ方などの模擬患者が話しやすい環境づくりなど、医療者のコミュニケーションにおける基本的な姿勢について指導した。そして、患者にとって関心事となっている苦痛や思いについて自ら語りかけ、患者が自発的に話せるようにしているか、患者の話をよく聞いているか、受容的共感的な態度で接し批判や価値判断を下していないか、といったコミュニケーションの内容についても、実際の学生の言動を取り上げ具体的にフィードバックした。

模擬患者の情報は事前に示され、学生はどのような話をするのか考えてはいるものの、模擬患者の反応については思い及ばず会話が途切れ沈黙となると、自分のことを一方的に話し出したり、趣味や旅行の話に傾倒してしまう様子が見られた。また、模擬患者が発した苦痛や思いについては受け止めないままに、大丈夫といった安易な励ましに帰結したり、事前に考えてきたこのようにするとよいといった指示や指導に終始してしまう様子も見られた。一方で、コミュニケーションをとることについて模擬患者に承認を得て、受容・共感・傾聴といったコミュニケーションスキルを用いる様子も見られた。

学生がコミュニケーションをとった直後に教員から個別にフィードバックを受けることで、自己のコミュニケーションにおける現状と課題を認識し、どのようにコミュニケーション能力を高めていけばいいのか、学生が具体的に思考できることを念頭に指導にあたった。

学習を深めるための工夫

基礎看護学実習Ⅰでは、初めて患者と接し、主体的に患者とコミュニケーションをとり患者に関心を寄せること、さらに2日間の関わりにより関心の深まりやコミュニケーションの発展を実感することに重点を置いている。1年次にこの経験をするのは、2年次での初めて受け持ち患者をもち看護過程を展開する実習、さらにはその後の専門領域別の発展的な看護実習の動機付けになると考えた。そのため、今回の学内実習では、教員などの看護実務経験のある教員が、模擬患者として患者になりきり、看護学生と患者として出会い、コミュニケーションをとる経験を重視した。また、臨地での実習を想定し、模擬患者の他に臨床指導者役も設定し、臨地実習と同様にコミュニケーションの振り返りや指導も実施した。さらに以下の点を中心に工夫した。

1. 初めての患者とのコミュニケーションで想定される場面の設定

模擬患者は、これまで1年生と関わりが少なく看護師として臨床経験のある方（教員を含む）にお願いした。実際に生じると予測される痛みや入院による苦痛について、意図的に発言をお願いした。さらに日を追うごとに、受け持ち患者とのコミュニケーションが、発展・深化していくことを学生が実感できるように関わってもらった。特に、学生が患者とのコミュニケーションにおいて相互作用を感じられるように、初日の緊張した面持ちでの挨拶から始まり、徐々に緊張がほぐれていくよう心掛けてもらった。

2. 連日の新しい情報と患者の変化

臨地実習では、患者の状況は日々変化するため、2日目に模擬患者の情報も追加した。学生自身も初日のコミュニケーションによる情報収集やフィードバックを経て、模擬患者への人間としての関心、患者に寄り添う姿勢を強くしている様子が見られた。そして、学生の手からの関心や患者の力になりたいという思いを受け、模擬患者自身も学生に親近感を抱く様子が見受けられた。患者からの発話があるだけでなく、疾患や入院生活、家族への思いについても語るなど、天気やニュースといった世間話から個人的な話題について変化していった。このような模擬患者とのコミュニケーションの変化から、コミュニケーションは一方的ではなく双方向であり、互いの反応によって多様に変化する相互作用をもつことを実体験として得ることができた。



教員からの個別指導及びカンファレンスの様子

学生の反応

今回の学内実習における学生の学びは、以下の4点に大別される。

まずは、機を逃さずに学生に個別指導ができたことにより学生が自己の課題を見いだせたことが挙げられる。「自分の苦手な部分を見つけ出すことができた。学内実習だからこそ実践した直後に教員や学生からフィードバックをもらえ、自分の改善点や良い部分がみえた」「模擬患者とのコミュニケーションをおこなったことで実際の臨地実習をイメージし、意欲的に取り組むことができたことが良かった。また、担当の先生からフィードバックをすぐにもらえたことで自分を客観的に見ることができ、振り返りをすることができた」「普段の看護基本技術Ⅰの演習では、学生同士が患者役と看護師役をするため具体的に患者さんをイメージしてコミュニケーションを取るということが難しく感じていた。学内実習でも模擬患者とのコミュニケーションでより具体的に患者さんとのコミュニケーションのコツなどを学ぶことができ、日頃の演習にも繋げていきたいと考えることができた」という学生からのコメントが見られた。通常の講義演習といった授業とは違い、模擬患者とのコミュニケーションをとることで臨地に近い緊張感を保ちながらも、学内実習だからこそ学生個々のコミュニケーションを教員がその場で評価し、客観的かつ具体的なフィードバックを得たことで、自身のコミュニケーションを振り返り自己の課題を見出すことができた。

次に、コミュニケーションについて段階を重ねた学びを得られたことである。具体的には「ロールプレイ演習ではコミュニケーションを積極的に行うことができなかつたが、その後のグループワークや、カンファレンスを通して患者さんに対するコミュニケーションを理解し、模擬患者とのコミュニケーション演習では積極的に患者さんと話すことができ、患者さんの体の状態や症状、不安に思っていること、心配なことを聞くことができ学習を通しての成長を感じた」、「ロールプレイ演習の際に苦しがる患者さんに、どうしたらいいかわからず、非言語的コミュニケーションをとろうと、タッチングを行った。その時、患者役の教員からのフィードバックで、とても褒められて、この行動が正解だったと言われたことが印象に残っている。患者さんとのコミュニケーションのとり方を学ぶことができ、看護とはなにかについて深く考えられた」、「模擬患者さんと関わることで自分のコミュニケーションの段階が分かった。2日目の患者さんとのコミュニケーションで、本音を伝えてもらって嬉しかった」などのコメントがあった。ロールプレイ、自己の特徴と看護の意味の考察、模擬患者とのコミュニケーションといった学習を積み重ねることにより、自分を知り、看護学生としてのコミュニケーションの在り方、コミュニケーション技法の活用といった学びの広がりや深まりが得られた。また、模擬患者とのコミュニケーションを通じて、相互作用や関係性の発展・深化という信頼関係が構築される過程も体験ができた。学生は、コミュニケーションにとどまらず看護そのものが患者との相互関係にあることへの気づきを示していた。

また、グループワークやカンファレンスを経た他者からの学びも認められた。「今まで自分のコミュニケーションに対して深く考えたりしたことが無く、看護学生という立場からの患者への接し方がこんなにも難しく思い通りにいかないのだという事を痛感した。自分の患者に対しての振る舞い方、特徴について、第三者の意見も聞きながら知る事ができた事がこの実習の1番の成果であり良かった事である」、「実習中にカンファレンスなど自然と意見交換をすることができたので、看護学生として実習に取り組んでいる実感が湧いた」、「自分一人では行き詰まっていた課題がカンファレンスで共有することによって、‘そういう考え方をすればよかったのか’と気づきに繋げることができた」など、学生同士で問題解決に取り組み、意見を出し合い考えを共有することで、多様性を知るとともに他者から学ぶという学習ができていた。

さらには、看護教育課程における早期体験実習のねらいのひとつである、看護への意欲を高める契機にもなっていた。「病院オリエンテーションでは、実際に病院に行ってみることはできなかつたが、各病棟

の担当者さんからの説明で、そこでおこなっている業務だけでなく看護師との連携などまで知ることができ来年実習で行く際に、自分の目で見てより学習を深めたい」と、対面での学習はかなわなかったが病院での看護の実際に触れ、今後の学習に対する意欲向上に繋がった。

おわりに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受け、急遽臨地での実習が中止となった。2020年度、2021年度も同様の状況であった。その際には、模擬患者は設定せずに、遠隔病院オリエンテーションからの学び、DVD等による病院内での臨地実習の内容の学習、想定される看護学生が接する倫理的場面の考察などを行ったが、‘患者との初めての出会い’を創ることはできなかった。基礎看護学実習Ⅰでは、患者との相互作用のコミュニケーションから、看護学生として患者に関心を寄せ、「患者さんに何かしたい」「元気になってほしい」という思いを醸成したいと考えていたため、大きな課題が残った。そのため2022年度は、‘患者との初めての出会い’に重きを置き、学内実習を構成した。学生の反応からは、模擬患者であることを忘れ、緊張し挨拶にも時間を要する学生、さらには何を話したらよいか考えられない学生がみられた。一方で、自分の個人情報を必要以上に開示してしまうことや、患者の反応に即応できないなど、学生自身の課題も明らかとなった。初めての患者とのコミュニケーションをという意味では、十分に学内でも学びになったと思われる。しかし、病院で実際に看護師の行動を見学すること、チームの一員として時間を過ごすこと等、臨地でしか学べないことが多いことも浮き彫りとなった。学内で何をどのように実践し、臨地で何に重きを置き学ぶのか、今後も模索していきたい。

土屋 彩夏（和洋女子大学 看護学部 看護学科 助手）
竹内久美子（和洋女子大学 看護学部 看護学科 教授）
伊藤 雅子（和洋女子大学 看護学部 看護学科 助手）
小笠原祐子（和洋女子大学 看護学部 看護学科 准教授）

（2022年11月15日受理）